

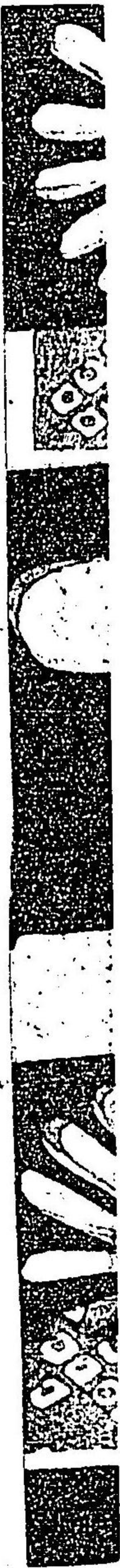
楠公記

特59

947

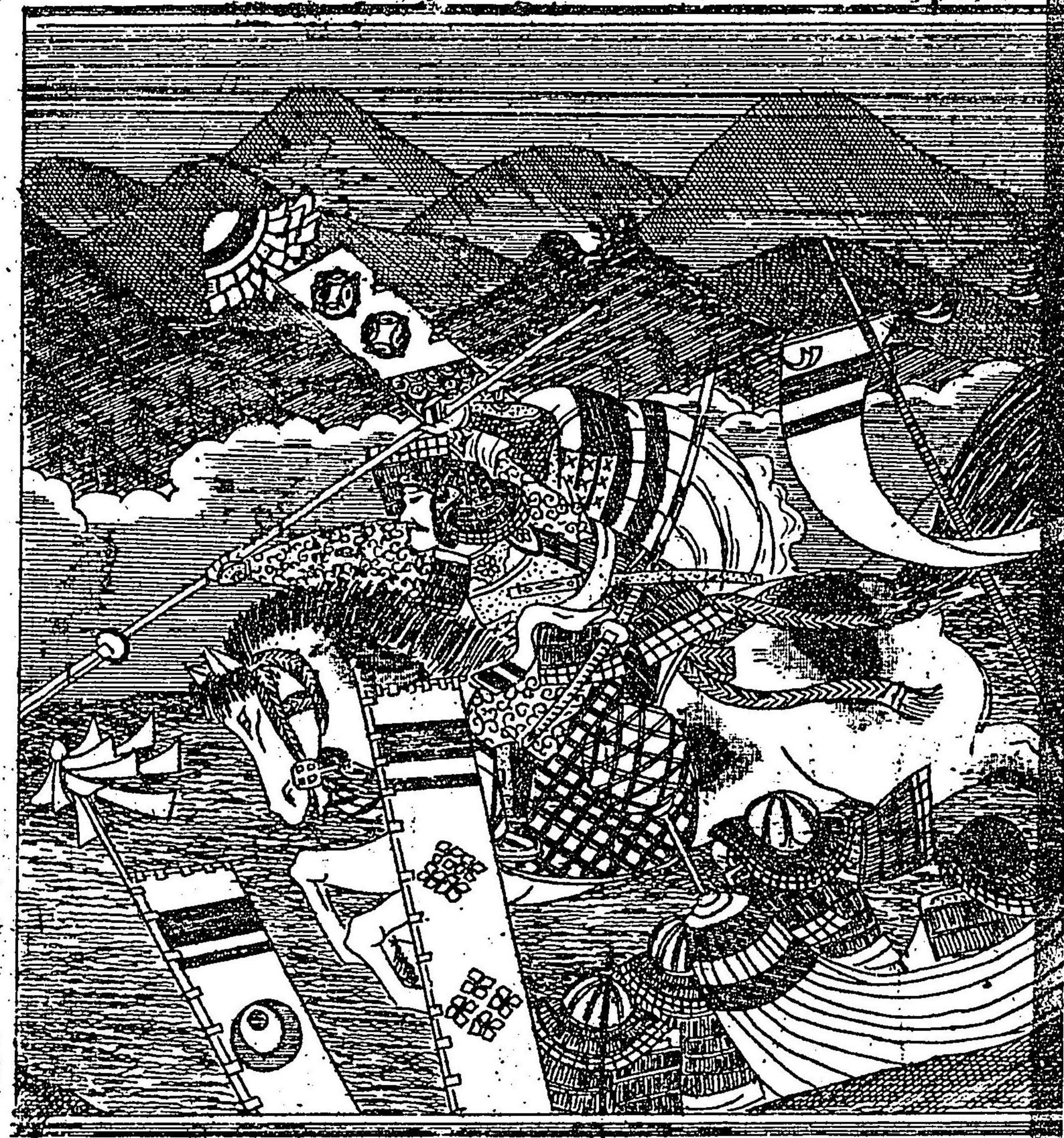
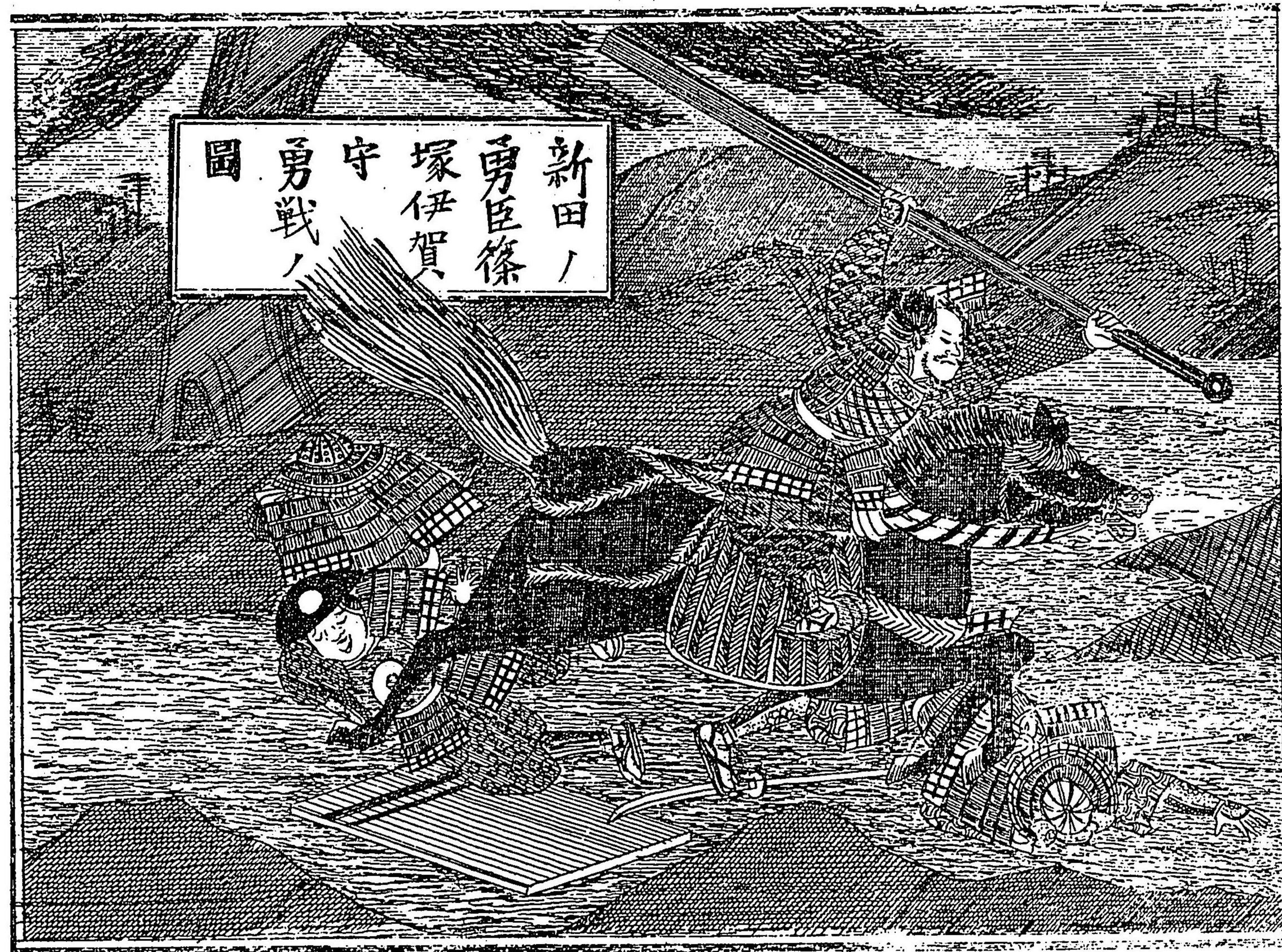


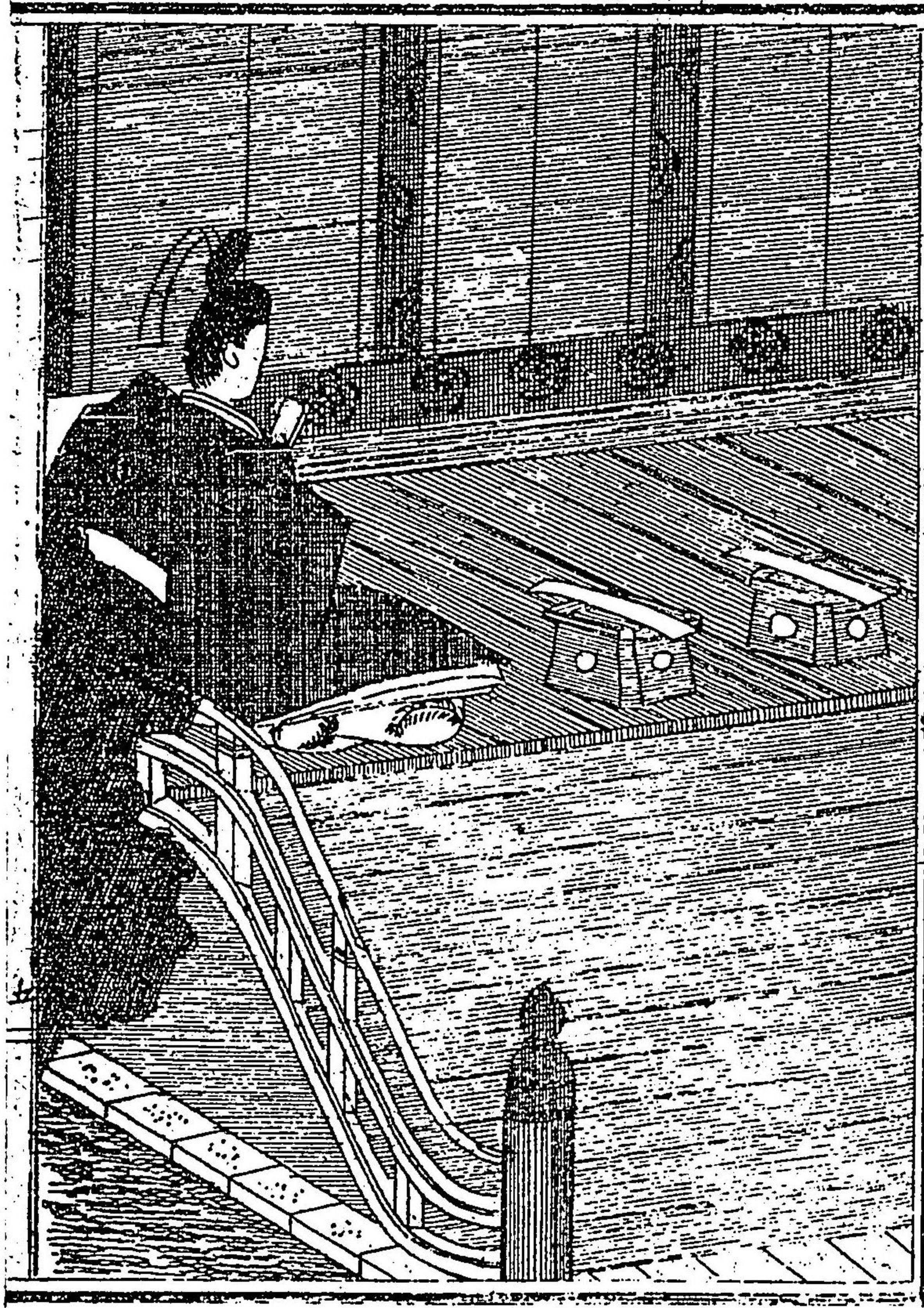
No. 23749/











爰又安邦定国の謀今古無双の忠臣と後  
 代又尊敬する贈正  
 三位右近衛中將極朝  
 臣楠正成の世系を尋  
 ぬる又人皇三世代敏  
 達天皇の後胤其玄孫五  
 代井出左大臣極諸兄公  
 和銅年中如て帝より  
 極の姓代賜ふ夫より八  
 代の末正三位六代後  
 齋掃部公極の盛仲甚  
 子左衛門尉正玄と云る人  
 あり世々河内国赤坂又



住す庭は犬にゐる  
 のと称せりされり正  
 をふるひ家富一か  
 正玄三十一才も及ぶ  
 まて一子とけ九ハ妻  
 子是を深くな  
 けさ 和州平群郡  
 志貴山歡喜天の毘  
 沙門天ハ靈驗あまハ百日間参籠  
 才智勝せ一男子一人授け給  
 へと祈誓をかけ一は夢  
 黄金の甲冑を  
 鎧一官人口  
 中に入るとおぼ  
 て懐妊あり奈むと十  
 四月月あし七男子誕生  
 毘沙門天のふふ一子な  
 礼ハとて知名お多門九と  
 号し聰明叡智衆は超過せり





住す庭は大である  
 のと称せりされ正  
 をふるひ家富一か  
 正五三十一才及ふ  
 まて一子たけ九ハ妻  
 子足深くな  
 けさ和州平群郡  
 志貴山歡喜天の毘  
 沙門天の靈驗あはれ百日間参籠  
 し才智勝せ一男子一人授け給  
 へと祈誓をかけり又  
 黄金の甲冑を  
 鎧一官人口  
 中に入るとおぼ  
 て懐妊あり奈むと十  
 四月月あはれ男子誕生  
 毘沙門天のふし子な  
 水はとて知名お多門九と  
 号し聰明叡智衆は超過せり次



水







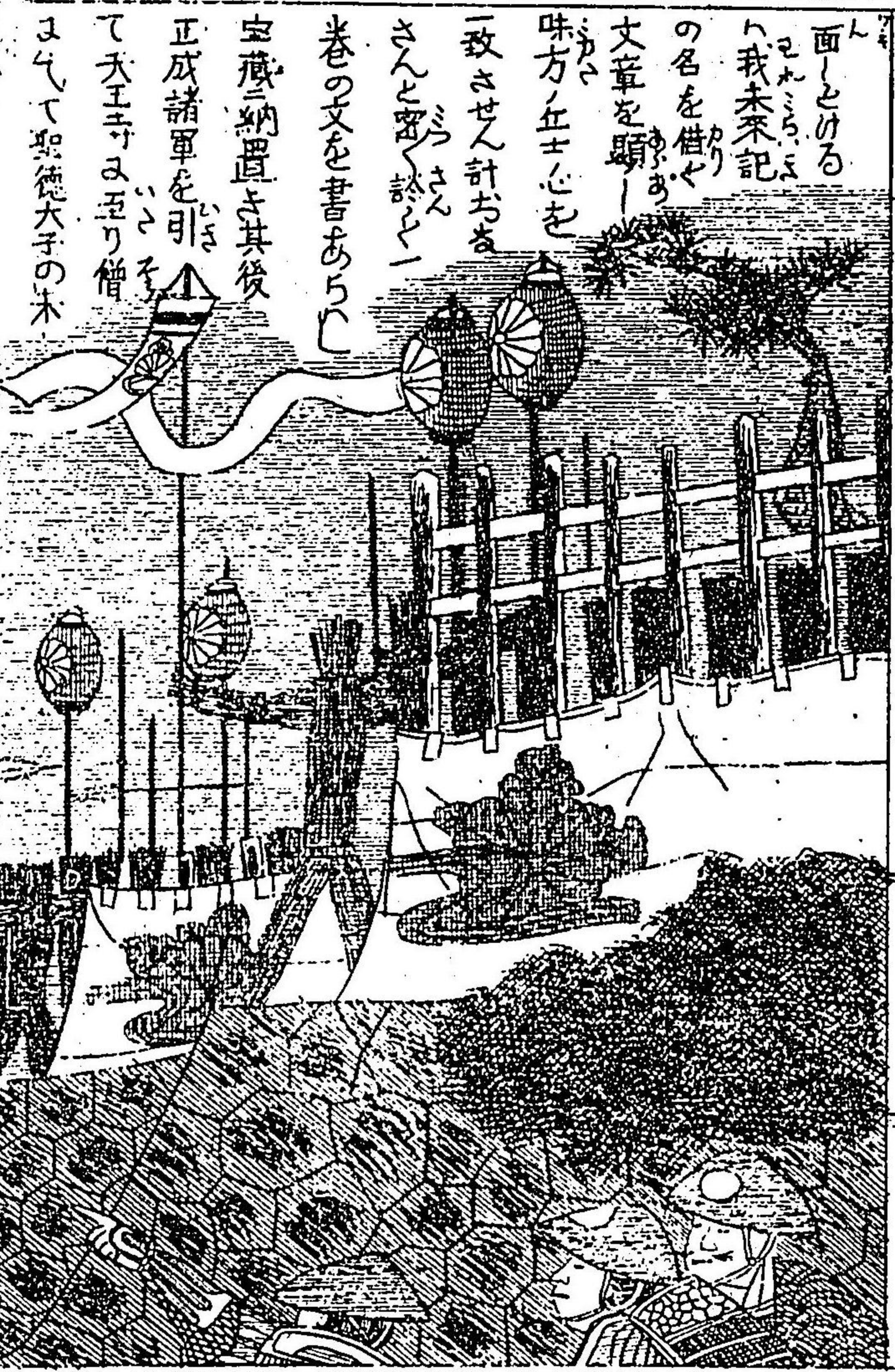
向ハトシキハ  
 錦織俊成石川  
 義純ホも遂  
 又戦死一笠  
 置箱より帝  
 藤房と神巻を  
 表して赤坂に至  
 り賜ひる賊兵  
 径の赤坂に至り  
 ける又正成ハ弟  
 正季族正遠寺と共  
 を分ち奇計を以て  
 防戦を散々又



東軍を悩一けるカ  
 賊ハ大軍故正成又  
 謀を廻し討死の射  
 みと逃出と金  
 剛山よりたりける  
 敗軍ハ帝を宇治  
 又執事九リ頭と  
 高時ハ帝を隠岐  
 又従一奉る時又正  
 成 赤坂の城将湯浅定  
 佛を下し是より楠の勢日  
 又加る時又帝ハ千波の  
 り船又と隠岐の目を

近江伯  
 同三層  
 里坊ハ又正成  
 二年より正成  
 思ハ将の兵を用  
 る即米軍の一致  
 びんせと謀計を  
 又天王寺に至り僧

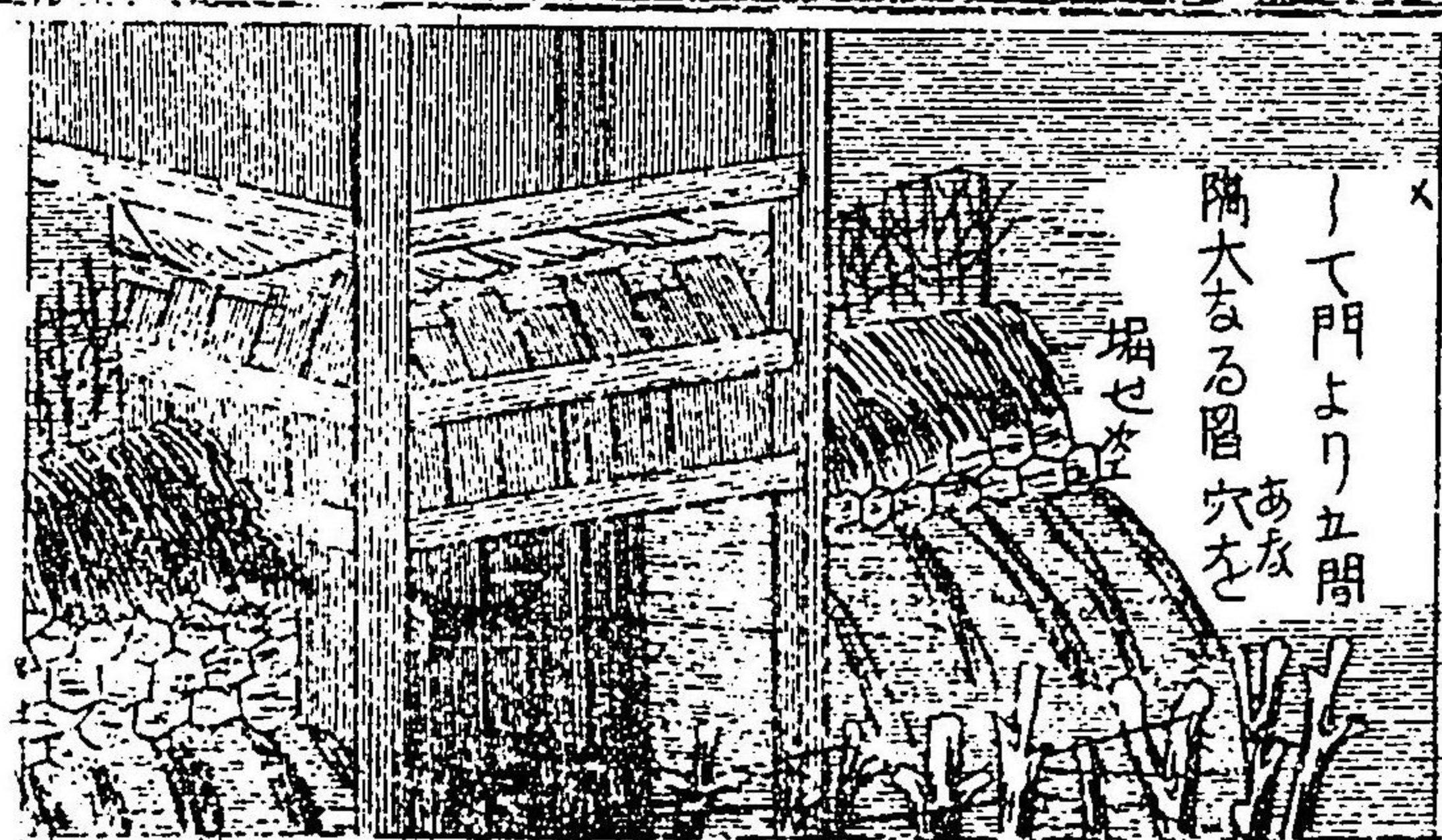
ハ



面しとける  
 我未來記  
 の名を借ぐ  
 文章を願  
 味方丘士心を  
 一致させん計おき  
 さんと密に談し  
 巻の文を書あらし  
 空蔵三納置き其後  
 正成諸軍を引  
 て天王寺又至り僧  
 よぐて聖徳太子の木

來記なりとく正成は  
 比ける其父は曰く人皇九十歳  
 又至天下一乱て主不安此時東  
 魚來り西海は吞じ日西海没す  
 三百七十余ヶ日西島來と東魚 食ふ  
 其後海内一又歸する事三年猿猴の  
 如き者天下は掠る三十余年大凶饑  
 て版元云及諸小は城閉と勇と  
 一攻又悦びけるとそ板も正  
 成の地りたる千早城ハ山  
 城ふるも正成奇計を以  
 防くかのへ又東國の兵大軍

屈む  
 是ち  
 能す或矢種  
 の盡け川ハ其東  
 形又鎧お板と東  
 軍欺むと数万の  
 矢を棄取る其謀  
 計一以てと積又  
 中又屈利尊氏  
 と云る將の謀計  
 を迎一切をよぐ



て門より五間  
隔たる隙穴を  
堀せ



燈下又披見て大悦  
ひ且小瀬の忠義を  
感同氏の耳に口寄  
謀計を授く左所陳又  
飯て返書を送る  
刑の陣に送る事さ九ハ早  
待する事さ九ハ早  
速披よ見る小  
裏切承諾の上旨  
記尊氏大又悦  
其用意を備へ  
又正成八士率下知



臣 荒川式部の知  
巴なる小瀬左門又裏切を  
させんと荒川又密書  
認めさせ其夜深更  
及んで小瀬が  
若又失文放つま番兵取々小瀬又通ず左  
門之を披見る小荒川力重切お勸る書あり

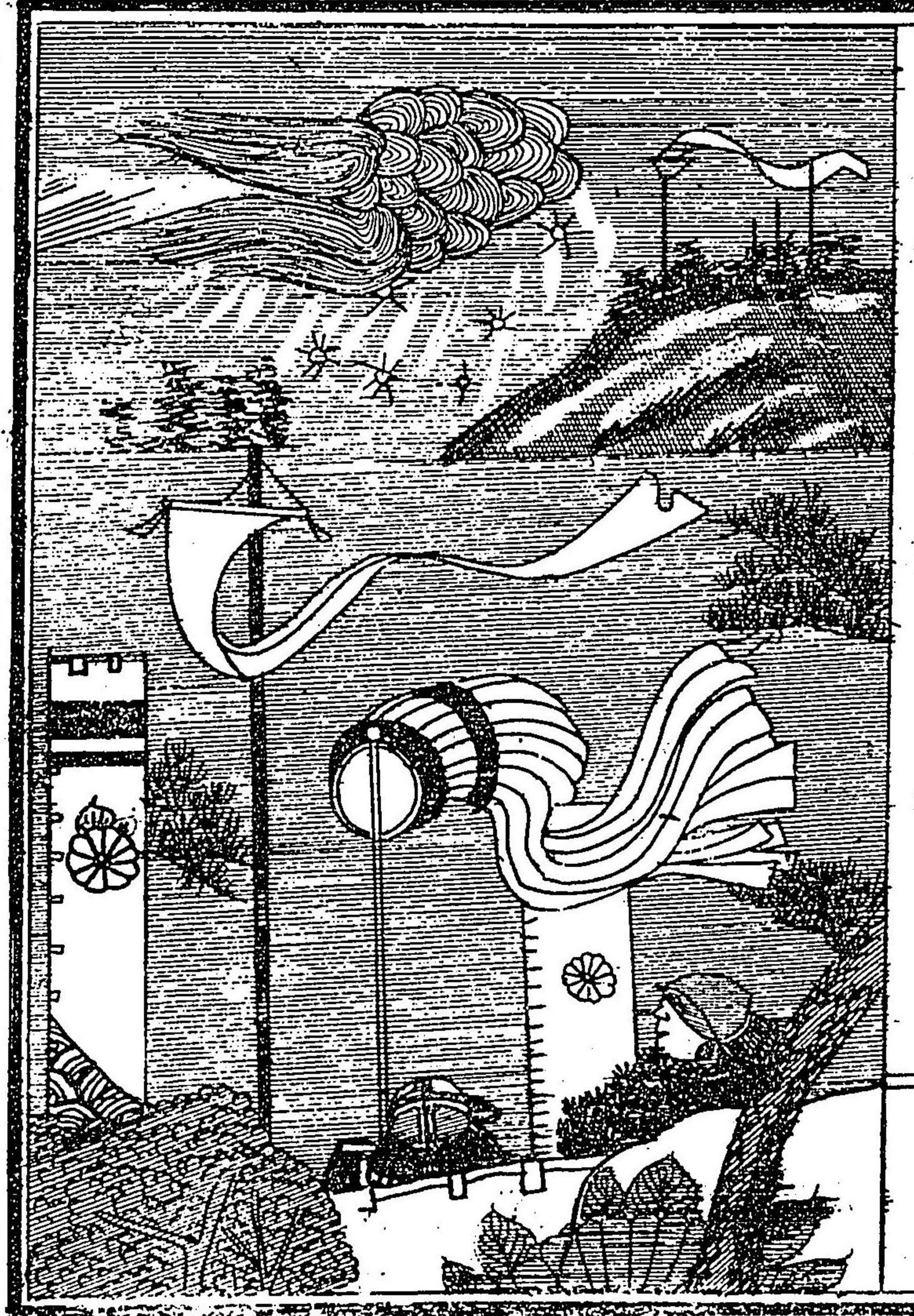


其中に刃を植其用意を調へ付届ける所へ斯とも不  
 知足利勢大切を立寄る時ありしに城又空懸るよ  
 小頼之は座へ早更込入ると云門は開き早更又のれ  
 元更入たり其川より五百余騎暗く不案内門内へ入  
 けられ彼陥死し陥り荒川の二軍悉く皆殺すなりを  
 不知二陣三陣殺後れりと入りて城中より遊明わ  
 無く大木大石を投落せし先又進み足利勢右往左  
 崩れ入り元より暗の事されハ回士計して死せ  
 る者数えれず正時分ハ宜と相固をな  
 せハ四方より伏せる捕の勇兵一時よ  
 七陣ノ頃



〇は切て入駈立り足利  
 勢大軍と風奇計は陥り立直す  
 天色も無狼狽騒ぐたありな  
 り志貫右三門ハ足利  
 が陣の後退し陣  
 山又登り火お放てハ  
 炎一時又燃上り黒煙

天を覆ひしガハ足利



勢用お消

散々敗走

す正成ハ駆抜

く直義カ本陣

あるそ一突又切

崩せと手勢又下知

と駆立る小大將

直義大ニ驚き旗本

僅百騎カ隨へ明石城

さしと落たり又舟

手の方までハ焔々なる火也

ミと又捕カ謀計方々

と共勢三万余騎山々

の手と押寄る

正成やめて備お立

直此陣おも蹴散さ

人と扣へ所へ新田義

貞一万余騎まで馳

来り此敵義貞

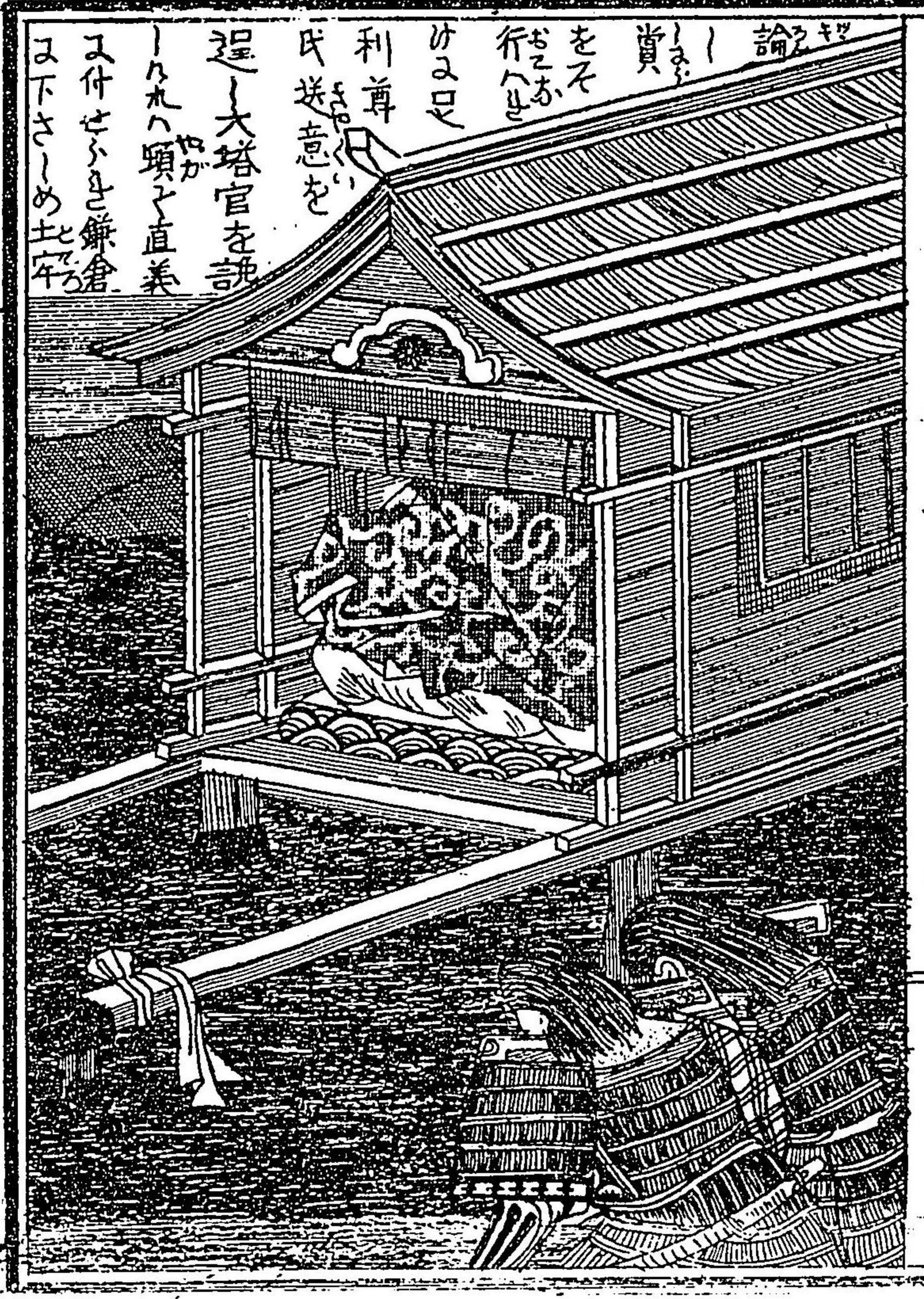
は給るへと望正

成新田軍お護と

二十万余の敵

次五





論議 貴を  
 をそ 行ふ  
 けり口  
 利尊  
 氏送意を  
 遅く大塔官を誅  
 一八九八頃直美  
 又付せり鎌倉  
 又下さしめ

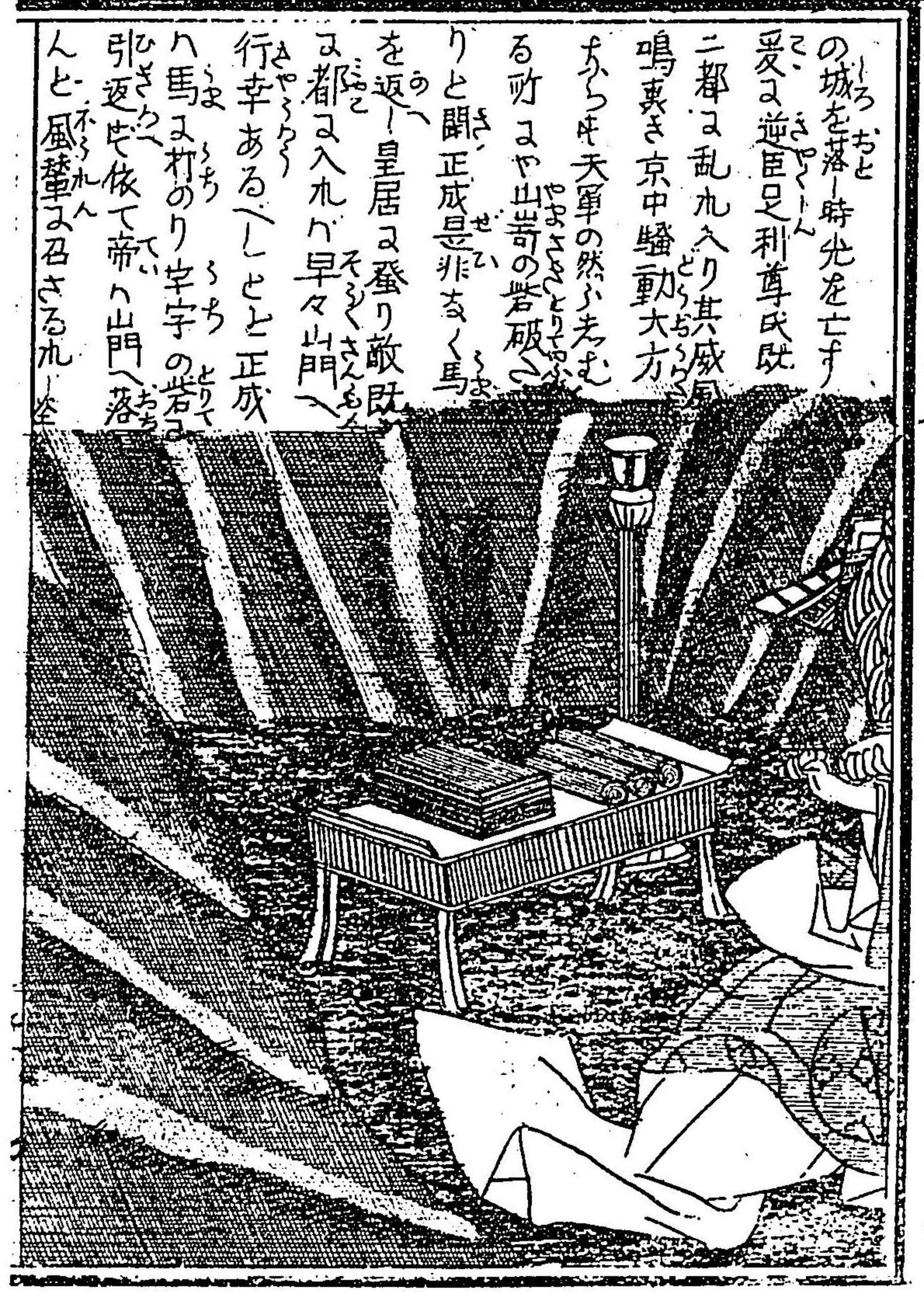


八千騎とあり  
 和州  
 又  
 一四一終は秋一奉  
 りける是より先北  
 條の残黨相模時先  
 を大將とて編又兵を催  
 け九八公家の世を憤  
 る武士馳集り勿ち一萬





旗を揚げ河州飯  
 盛山の城を築き大和  
 八半彼のものと  
 九り然と帝之を  
 驚き給はば諸  
 国逆徒退治の  
 め慈嚴僧正を  
 召て天安前  
 法を行なへる  
 正成大和又向  
 ひ謀畧秘術を  
 くしむくの  
 を破り飯盛山



の城を落し時光を亡す  
 爰又逆臣足利尊氏既  
 二都を乱れ入り其威  
 鳴夷き京中騒動大方  
 大から天軍の然るを  
 る所より山崎の岩破  
 りと闘正成是非なく馬  
 を返し皇居を登り敵既  
 り都を入れ早々山門へ  
 行幸あるしと正成  
 ハ馬又打のり宇字の  
 引返せ依て帝ハ山門へ落  
 んと風華を召さる九

とも駕輿一人も不冬す四門  
 を固武士鎧のまゝ街華の前  
 又従ひ山門へ急せよ斯ると  
 ころへ新田義貞も始廿余人の  
 面々其勢二万余騎馳來りて  
 君を守護して東坂本へ急  
 きける斯く正成は尊氏を屢  
 々やふりつゝ西走せしめ  
 ける是又於て正成を都へ  
 止ひる義貞を以て山  
 十六国の軍お総督せしめ  
 尊氏を征伐せしむ既に  
 義貞は則村を白旗の城



又くこむ義貞軍利  
 あふ成足利兄  
 第九国の兵を師て西走  
 義貞白旗のりこみを解  
 兵庫に陣す帝正成又命  
 て義貞を援けしむ正成  
 計を奏す成と虽  
 冬議  
 清忠  
 然りとす因  
 て正成兵庫を赴  
 けとも豫め事の齊する  
 を知り柳井の駅に至る



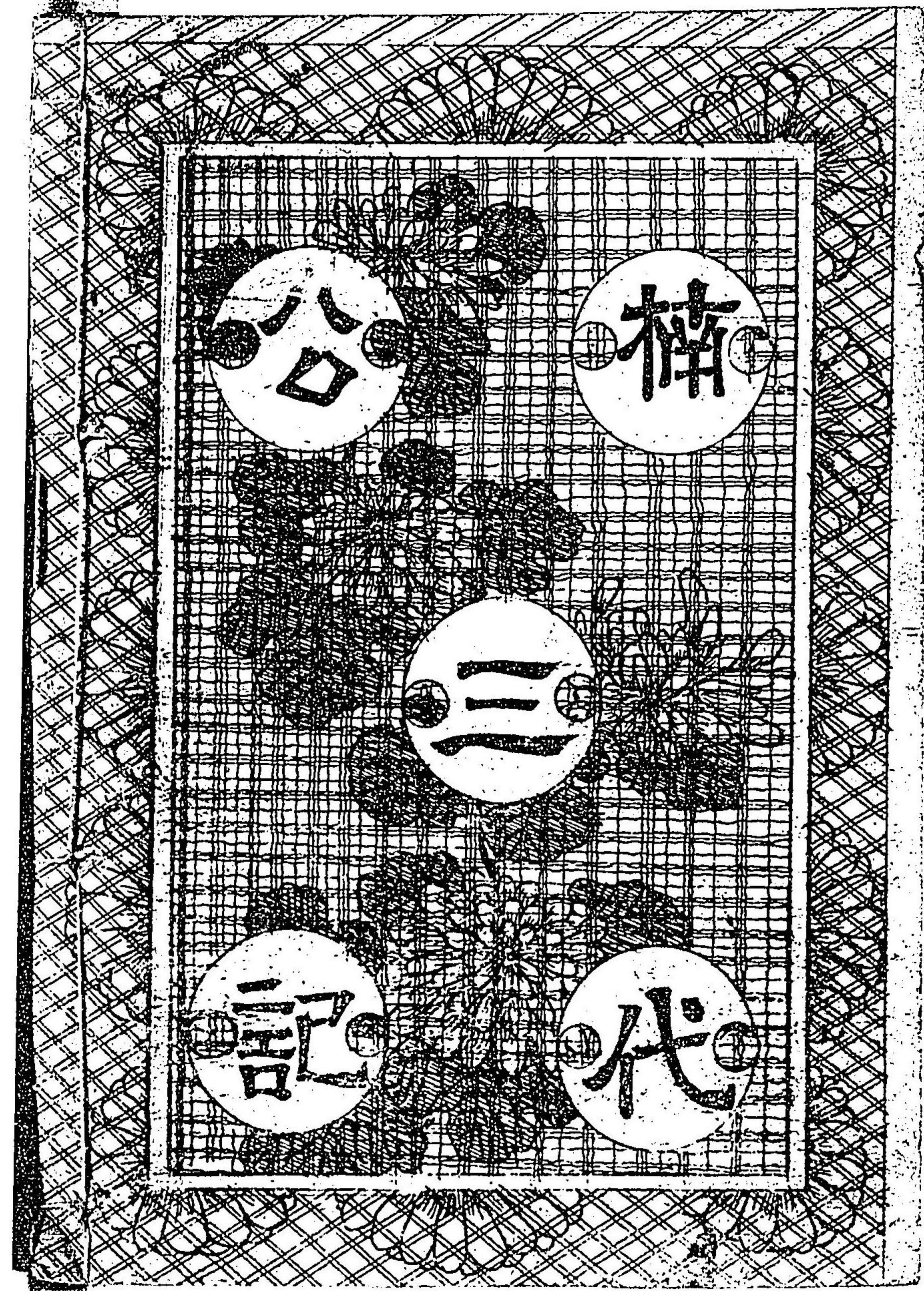


千正行  
を召して遺訓  
其身ハ余ノ所ニ至  
リカ戦ト申ト云



衆寡敵一のこく大ふぶれや弟正季  
と民家より互に刺して自盡  
四十才より実におもむべき忠臣なるは  
八官軍ミま力を落しけれども中よハ其  
仕のへどくれんやと勇立る  
者も多のせりりどぞ正行ハ桜  
井の駒まで父又別出遺命  
を受と河内又返る尊  
氏正成の首林  
正行を送る  
正行りたる  
こと限りなく  
ずて又ドドん空





楠

公

三

代

記